馬寄団地解剖ミュージアム

さよなら、馬寄（まいそう）団地。

終戦、焼野原、住宅不足。
約三十平米に家族三世代が暮らす時代。
51C型の間取りの誕生と、
日本初のダイニングキッチンの導入。
そして二〇一八年、
日本の住宅史に名を刻んだ建物が、
六十余年の歴史に幕を下ろす。
この夏、その目で、
住まいの歴史を見に行こう。

「大里南市民センター」にてセミナー（40分）

移動 徒歩5分 →

「馬寄団地解剖ミュージアム」全8室を鑑賞

4階建ての馬寄団地を、階ごとにテーマを設定して展示空間を作成。

馬寄団地の歴史と現地での発見
51C型誕生秘話、暮らしの素はこうして生まれた
ダイニングキッチンの誕生と現代の住まい
nLDKの定着が日本の住宅にもたらしたものとは？

・1階「仕組」基礎部分の構造が見られる仕掛けを施した、構造体験室。
・2階「背景」51C型に至るまでの、日本の住まいと暮らしの歴史を紹介。
・3階「比較」生活スタイル・間取り・広さ・平均身長等、当時と今を徹底比較。
・4階「展開」現代風にリノベーションした馬寄団地。大胆な発想の空間体験。

開催日時：2018年8月18日（土）

集合場所：大里南市民センター 2階 会議室 ／ 参加費：無料

午前の部：11:00 ～ 13:00（10:30より受付） 定員15名
午後の部：14:00 ～ 16:00（13:30より受付） 定員15名

・参加対象者：中学生・高校生、および一般の方々。
夏休みの自由研究としてもお勧めいたします。
・お申込方法：メール ✉ お名前、年齢、メールアドレス、ご希望の時間帯、学校名（所属）をご記入の上「isami@ip.kyusan-u.ac.jp」までお申込みください。
電　話 ☎ 092-673-5781

＊先着順、定員に達し次第、受付け終了とさせていただきます。
＊午前・午後ともに内容は同じです。

〒800-0037 北九州市門司区原町別院13番27号
電車：JR門司駅から徒歩約15分
バス：原町バス停から徒歩約1分

「馬寄団地解剖ミュージアム」
福岡県住宅供給公社 馬寄団地3号棟／福岡県北九州市門司区社ノ木1丁目7
1954年／昭和29年 築64年／鉄筋コンクリートラーメン構造4階建／全24室（内8室を解剖展示）
延床面積：993.55㎡ 約300.5坪／住戸面積：51C型 35.40㎡ 約10.7坪

＊馬寄団地解剖ミュージアムには冷房設備はございませんので、飲み物の用意する等、各自で暑さ対策の準備をお願いいたします（大里南市民センター2F会議室1は冷房設備あり）。

■主催：九州産業大学住居・インテリア学科　■所有／管理：福岡県住宅供給公社　■解体作業指導協力：福屋建設株式会社　■ミュージアム製作：九州産業大学住居・インテリア学科2年生72名

馬寄団地解剖ミュージアム

プロジェクトの概要

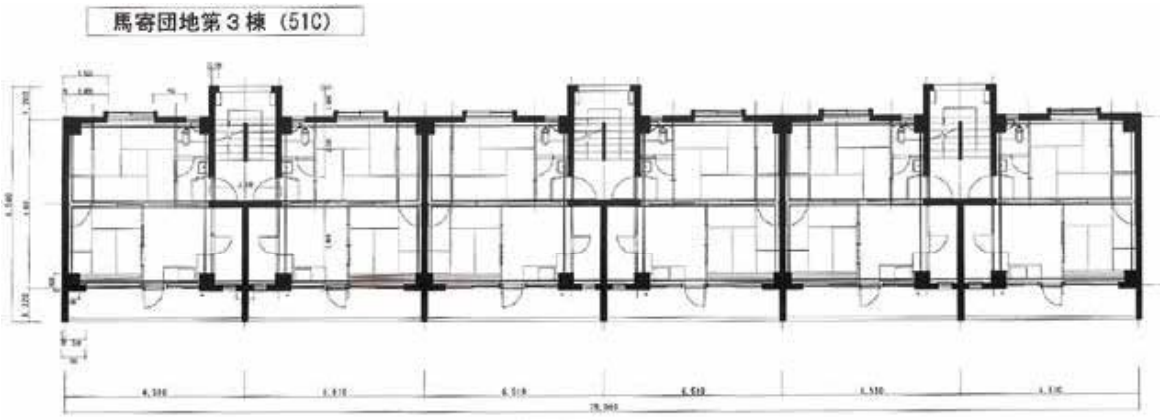
建築の葬りかた

馬寄団地（北九州市門司区社ノ木）は、わが国の現代住宅史上とても重要な「51C 型」（次々頁詳述）が現存する２DK、全 24 戸の集合住宅建築である。これまで福岡県住宅供給公社が所有し管理してきたが、今年中の解体と建て替えが決定している。

このプロジェクトはその馬寄団地を教材に、まだ建築を学び始めて１年あまりの私たち、九州産業大学建築都市工学部住居・インテリア学科２年生の「基盤強化プロジェクト実習Ⅱ」という授業として開始された。過去を振り返るということは、未来を見ることである。馬寄団地を訪ねても、最初は何を見ればよいのか全く分からなかった平成生まれの私たちだったが、戦後間もなくの日本人が住まいについて何を考え、何をつくり、そこでどのように生活していたのか。時間を超え、臨場感・現実感を持って学べる二度とない機会となった。現場で実物を体感するにとどまらず、建設業者の指導で室内の解剖を体験し、さらに展示空間をつくって北九州市民に知見を示すという、大学の教室の中では絶対に実施不可能な取り組みだった。

終戦から９年後の昭和 29 年（1954 年）、社会の要請から生まれた馬寄団地を様々な視点から解剖することにより、住まいは社会や生活の中にある現実であるということを学べたことが、このプロジェクトにおいて何より重要だったことである。馬寄団地はほどなく解体され、現場は更地になる。私たちのプロジェクトは「馬寄団地解剖ミュージアム」という。医学部の学生は亡くなった方を解剖させていただき、人体の成り立ちや病気などを詳しく学ばせていただく。その関係を建築都市工学部の学生である私たちと建築に置き換えたくて「解体」ではなく「解剖」とした。

死してなお生かすということだろうか。時代を担う重要な役割を果たした貴重な建築（人間ならば恩人）の敬意ある葬りかたとしてこのプロジェクトを発表する。



参考図（平面図）

馬寄（まいそう）団地解剖ミュージアム 一階

「仕組」

基礎部分の構造が見られる
仕掛けを施した、構造体験室。

馬寄（まいそう）団地解剖ミュージアム　一階

「仕組」

基礎部分の構造が見られる
仕掛けを施した、構造体験室。

１．51C 型のこと

戦争が終わりこれからの住宅を考える。その当時、これからの日本を考える上で求められている住宅にする必要があった。日本社会の向かう方向へ住宅は向かい始める。住宅の変化により従来の家族形態を変え、さらに家族の関係まで変えてしまうまで変えてしまう 51C 型は今の時代まで繋がる大きな変化の第一歩であった。現在でいう 2DK である。５１Ｃは、戦後の深刻な住宅不足を受けて、1951 年に公営住宅標準設計案の中から採択されたものの略称だ。正式名称を「公営住宅標準設計Ｃ型」という。国家事業として進められる事になるこの計画は、鉄筋による高層化、標準化による効率化低コストで衛生的であることであった。（日本という国や市民にお金がないのは当たり前だったから、工事費やサイズはコンパクトに住む空間を供給することに必死になっていた。）いかに容積を詰め込むか、ということではなくいかに住人が快適かという人間発想を、素直に追い求めることが東京大学吉武研究室によって提案された。51C の狙いは「食事の場所と就寝の場所を分離すること」(西山夘三、「食寝分離論」) と「寝室２室を別けて確保すること」(寝室分離) を限られた面積の中で成り立たせることにあった。そのために取り入れられた空間が「台所兼食事室」である。この「食事もとれる広い台所」の提案が、のちのダイニングキッチン (DK) 誕生へとつながったとされる。さらに、２つの寝室を壁で仕切ることによって独立性を高めた一方で、南側寝室と台所兼食事室との間を全面開放できる間仕切り。にして、この２室をフレキシブルに使えるようにしている。ほかにも、壁で仕切った２室それぞれに押入れをつけ、それらを布団が納まるサイズにする , 外側のバルコニーを洗面洗濯場と連続させ物干し場として使えるようにする、といった提案が込められている。また、玄関をでて向かい合う階段室は、住民同士が出入りのたびに、顔を合わせて交流が生まれるような工夫らしい。当時憧れの住居であった。つまり、食事と就寝の空間を分離させるといった「食寝分離」といった考え方や個人のプライバシーの確保といった今まで日本の住空間になかった新たな生活スタイルを確立したのがこの 51C 型という住空間であった。展示物としては、この部屋の模型と、床下の模型を制作して展示した。模型は現代と 50 年代の部屋をつくり、暮らしの変化を比較できるようにした。また、51C 型の団地や部屋の内部などの写真を展示し、壁に貼るだけでなく天井から吊るしたりして見る人を飽きさせない工夫をした。

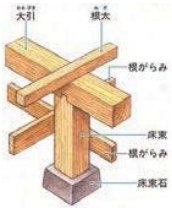
２．プロローグ・DK・床下のこと

入口付近には、馬寄団地がつくられた当時の写真を展示した。戦後の風景や住宅の写真などを集め、当時の人々の暮らしを想像しやすくした。また、51C 型についてのプロローグを年代別に紹介した展示物を設置した。

キッチン・ダイニングの写真を壁に展示した。現代のキッチンと比べかなり狭いので、立体物は置かず、大きさや距離感などを実際に体感できるようにした。

床下の構造は建築基準法の変更や技術的・環境的に支えることであり、文字どおり住宅の「基礎」「土台」であると言える。従来床下は土壌面からの水蒸気が逃げ場を失い、深刻な湿害を引き起こす。床下を解体するとたくさんの新聞紙が出てきた。この新聞紙は湿気を吸う役割があり、床下にたくさん敷かれていた。木材の特徴の湿気を吸いやすく。そして湿気によって木材が腐ってしまうのを防止するためだと考えられる。

1:20模型



床下の構造は建築基準法の変更や技術的・環境的に支えることであり、文字通り住宅の「基礎」「土台」であると言える。従来床下は土壌面からの水蒸気が逃げ場を失い、深刻な湿害を引き起こす。床下を解体するとたくさんの新聞紙が出てきた。この新聞紙は湿気を吸う役割があり、床下にたくさん敷かれていた。木材の特徴の湿気を吸いやすく。そして湿気によって木材が腐ってしまうのを防止するためだと考えられる。

馬寄（まいそう）団地解剖ミュージアム 二階

「背景」

51C型に至るまでの、
日本の住まいと暮らしの歴史を紹介。

馬寄（まいそう）団地解剖ミュージアム 二階

「背景」

51C型に至るまでの、
日本の住まいと暮らしの歴史を紹介。

今回、私たちが馬寄団地を解剖し、展示空間にするにあたって、事前に51C型について研究した。51C型がこの世に生まれた経緯、時代背景、及び戦前から戦後へと至るまでの建築の歩みを調査した。そのようにして集めた資料を私たちのみで保持するのではなく、現代に生きる多くの人々へ伝えるべきと考えた私たちは、馬寄団地2階201室、202室では展示を流れゆく歴史とそれに伴う日本の住宅の変移、特に広さの変化について焦点をあてた。

まず、51C型について簡単に説明する。戦後の住宅難において、住居の供給のため設計された51C型は「寝食分離」という考えに基づいており、文字通り、飲食をするところと睡眠をとるところが分かれている。これは戦後当時としては大変新しい発想であった。また、しゃがみ込まなければ洗い物や家ことなどができない従来の住宅とは異なり、立ったまま作業することができるキッチンが存在しており、家族団欒ができ、家族のプライベート性の高い設計になっている。この型は現在の日本の基本的なｎLD型の基礎に近いものになっている。

さて、ここで展示空間の説明をしたいと思う。私たちが展示空間を構築するにあたって大きく２つの要素を軸にした。

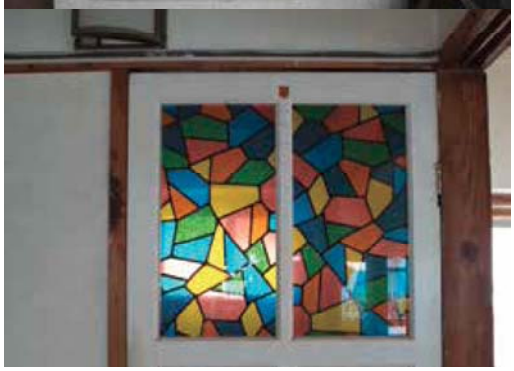
一つ目は体感である。これは展示を見に来られた方へ馬寄団地が建てられた当時の人々の暮らしぶりや、51C型のつくりを見て感じてもらうことで馬寄団地及び51C型への理解を深めてもらうことが狙いだ。この、体感を実現させるために具体的に私たちが行ったことを挙げていく。まずは室内に当時の日本人の平均身長の等身大パネルを配置した。そうすることで現代とのモジュールの違いを明確にした。当時の日本人は現代の日本人よりも平均身長が低く、それに伴い現代と比べて部屋の寸法や扉も小さく作られている。また、畳は、江戸間や中京間といった一般的に知られている畳のサイズとは全く異なるもので、（1,850mm×955mm）と中京間に近いサイズでありながらも独自の寸法になっている。また、当時の生活の様子が分かる実際の戦後の人々の暮らしぶりが撮られた写真を建具へ配置した。これは文字だけでは決して伝わることの無いリアリティを伝えるために行った。また、室内の鴨居や畳、押し入れを解剖し、断面や素材をその目で確かめることができるようにした。住宅を解剖するという大変貴重な機会がなければ決してすることのできない貴重な展示であり、ましてや実際に人が生活をしていた空間である。教科書に書いてある以上のモノを獲得することができるような展示空間ができあがった。私たちは上記の体感を軸とした展示を一室に集約させた。

そしてもう一つは知識である。これは先述したように私たちが馬寄団地を解剖するにあたって収集した情報を開示することが目的である。私たちが調査した51C型の概要、発生起源、バックグラウンドをまとめてパネルにするだけでなく、戦前、戦後直後、戦後、現代への歴史の変移を主に起きたできことを年表にすることで、日本の住宅の変化と紐付けた。また、そうすることで見えてきた住宅の改良を時系列でまとめた。さらに、各年の著名な建築の紹介をすることで住宅だけでなく建築業界全体の系譜も明らかにした。具体的な、展示方法として、まず、展示空間である一室を３つの展示空間に分けて、展示する内容も大きく戦前、戦後、現代へと分けてそれぞれ一室ごとに、展示した。このようにした狙いは、展示空間に来られた方の動線と展示している歴史の流れを違和感なく理解してもらうためである。このようにすることで日本の住宅が徐々に変化していった様がよく理解できると考えた。また、一室ごとにその室に割り振られた時代の平均的な住宅の模型を配置した。模型を配置することで、日本の住宅の広さに目を向けることができるようになり多次元的に日本の住宅の変移を理解することができるようになった。

馬寄（まいそう）団地解剖ミュージアム 三階

「比較」

生活スタイル・間取り・広さ・平均身長等、
当時と今を徹底比較。



馬寄（まいそう）団地解剖ミュージアム 三階

「比較」

生活スタイル・間取り・広さ・平均身長等、当時と今を徹底比較。

１．計　画

三階は馬寄団地の現地調査で、実際の寸法を体感することで、狭く不便だと感じたが、当時の生活や家具配置を予想することが楽しいと感じ、他の人にも体験してもらえないだろうかと考えた。そして、生活スタイル・間取り・広さ・平均身長等、当時と今を徹底比較するという案が生まれた。昔と比べて現代の部屋や家具が大きくなったことを実際に比べ、どのような点が不便と感じるのか、現代の家具を置くと何人までが生活可能か推測しながら楽しんでもらう。しかし、当時の生活風景を再現するために、当時の家具や小物を集めることは大変であり、コストがかなりかかる。そのため、それぞれの部屋に今と昔の家具の大きさを段ボールで再現し、この大きさだと何の家具に該当するのか予想して楽しんでもらう。また、当時の暮らしが分かる写真や部屋に実際に残っていたものを展示し、当時の生活を体感してもらい、見たことのある人には懐かしく、見たことのない人には興味を持ってもらう。比較をすることで、時代の変化が分かりやすくなり、当時を知っている人には、知らない世代に伝えるきっかけにしてもらい、当時を知らない人には、現代の生活の便利さについて、改めて考えてもらいたいと思う。

２．解　剖

三階では今回の計画において主に二か所の解剖を行った。一か所目は、押し入れである。三階の展示案が当時と今を徹底比較のため、一方の部屋の押し入れを取り払って現代の部屋の広さに近づけるため解剖した。二か所目は、浴室の壁である。当初の予定では、浴室の壁すべてを取り払い二部屋の回遊性を持たせる計画だったが、時間的に不可能と判断されたため一部分を取り払い部屋同士のつながりをわずかにでも感じることができるようにした。押し入れの解剖では、当時の押し入れがどのように作られていたかをしることができた。押し入れの壁は、木材・モルタル・漆喰の三層でできていた。モルタルにわらのような繊維が入っていた。繊維が混ぜられていた理由は、湿気や衝撃を吸収するためのものだと分かった。そしてコンクリートの壁の中に木目のついたコンクリートがあった。その木目は、コンクリートを乾燥させるために木材で押さえていたためについた木目だった。他にも墨付けが残っている柱など今ではなかなか見ることのないものがおおくあった。浴室の壁は、コアドリルを用いてコア抜きを行った。壁の断面には、粗骨材や鉄筋が見えていた。

３．展　示

三階のテーマである「比較」を表現するため、解剖を行ったほうの部屋に平成（今）の部屋を再現し、団地そのままの部屋に昭和（団地）の部屋を再現した。今と昔の家具の大きさを表し、何の家具なのか考えてもらうために今と昔の家具の寸法を調べ、段ボールで実寸大の模型の部品を作った。現地では、段ボールの部品をガムテープ等で組み立てた。また、当時の平均身長がわかるように柱に平均身長を書き込み、今と昔の平均身長等身大パネル（男女別）を作った。そして、見に来た人が全ての部屋を見てもらえるよう床に順路としての矢印を書き込んだ。昭和の部屋を再現してみて思ったことは、昔の家具は想像したよりも大きかった。冷蔵庫、洗濯機、浴槽は、今と比較するとやはり小さかったが、タンス、テーブル、鏡台は十分な大きさだった。なので、住んでいたのが４人家族と想定すると改めて必要最低限の広さであったことがわかる。平成の部屋を再現してみて思ったことは、今の家具は部屋の広さと家具の大きさがあっていなかった。実際に自分が使っている家具の大きさと同じはずなのにとても大きく感じ使いにくそうだと感じた。押し入れを解剖して少し広くしたとしても４人家族が住むことは難しいと考える。

馬寄（まいそう）団地解剖ミュージアム 四階

「展開」

現代風にリノベーションした馬寄団地。
大胆な発想の空間体験。

馬寄（まいそう）団地解剖ミュージアム　四階

「展開」

現代風にリノベーションした馬寄団地。
大胆な発想の空間体験。

１．当時の空間と設備

馬寄団地は 51C 型であり、食寝分離が実現された団地である。暗く、じめじめしたイメージがあったキッチンが南側の日当たりが良い場所にくることで、家にいることが長い女性にとってやさしい間取りになっている。また、洗濯場が台所とバルコニーに隣接されていて主婦が洗濯物をすぐ干すことができた。南側の居室は子供部屋に使われることが多かった。台所の隣ということもあり親の目が届くようにこの部屋を子供部屋としていたのだろう。北側の居室は居間として、南側の居室は子供部屋として使われる傾向にあった。食事も台所ではなく、北側の居室で行われていた。このことから、部屋全体としては続き間のようになっているが、北側の居室と南側の居室は独立した室として存在している。

設備については、キッチンは 1950 年代からステンレス素材が使われるようになった。ステンレス素材が使われることによって、以前より衛生的で見栄えも良くなった。トイレは、現代と違いほとんどの家で和式トイレが使われていた。s らに、まだ上下水道の整備が進んでいなかったので、水洗トイレではなく汲み取り式トイレだった。風呂は、浴槽の隣に給湯器が取り付けられていた。浴室自体広くないので、浴槽もとても狭く、現代の風呂のように足がのばせなく不便であった。しかし、この頃は銭湯に行くのが主流であったので内風呂は珍しかった。

２．解　剖

天井を解剖すると細い小梁（屋根の重みを支えるための横木）が等間隔に並んでいることが確認できた。その上には、躯体（建物の構造を支える骨組み）のコンクリートを確認する事ができた。解剖前に、天井に換気口のようなものが四隅に見られた。この風の通り道は、写真にあるようにコンクリートと天井板の間の空間であることが解剖によって確認できた。

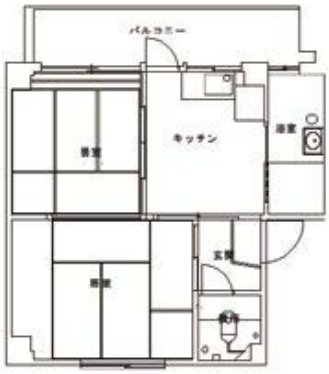
この時代に流行った 51C 型では、換気扇がキッチンにしかなく、換気をすることが難しい空間となっていた。これを解消するためにこのような天井換気の工夫が施されていたと見てとれる。

床の畳を取り外すと、木の板が無数に並んでおり、その下には木軸が等間隔に交差して並んでいた。板は固定されておらず、木軸に乗せられているだけの状態となっていた。躯体のコンクリートと木軸との間には空間があり、木の腐敗を防ぐ工夫がなされていたのではないだろうか。しかし、木軸が腐敗している箇所が多々あったので、木の板を踏むと凹み、歩きづらい状態となっていた。

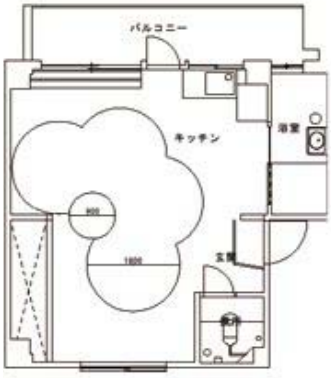
和室とキッチンを隔てていた下がり壁（天井から凸している壁）は、白い漆喰で覆われていた。しかし、下がり壁を解剖すると、中には横木が平行に数本並んでおり、漆喰は木の周りを囲ってできているものだとわかった。

３．最小限の生活　～人との関わり～

「現代」の世の中の生活から「未来」の生活を予想し、「過去」の団地での新しい生活を提案する。51C 型が誕生し、馬寄団地が建築されて約 60 年になる。私たちの生活は大きく変化した。世の中の技術は発展し、これからも成長を続け、私たちの生活にさらに影響を与えていくだろう。



↓



そこで、私たちは２つの観点からこの団地のリノベーションプランについて考えた。「最小限」と「関わり」である。「最小限」としたのは、これからの時代は人々の持ち物が減っていくのではないかと考えたからである。例えば、テレビや本、漫画などはスマートフォンやタブレットでネットを利用して見ることができる。すると、テレビ台、本棚は必要ではなくなる。また、衣類や娯楽用品などはレンタルをする、フリマアプリなどでの売買を行うことで、常に手元に置かなくなるだろう。さらに、洗濯機はコインランドリーの利用で必要ではなくなり、キッチン機能もレストランなどを利用したり、安価なインスタント食品、栄養バランスを考えたコンビニ食などを購入したりすることで、家で料理することも減り、最低限の機能で良くなるのではないだろうか。

では、生活に「最小限」必要なものは何か。寝て休息ができる場としてベッド、食事や仕事、勉強、誰かとの会話ができる場としてテーブル。この２つが「最小限」必要になってくるのではないかと考えた。

次に、「関わり」としたのは、一緒に暮らしていてもお互いにプライバシーは必要であると、住む人同士の関係について考えたからである。「好き」「嫌い」とは関係なく、話したい＝関わりたい、一人でいたい＝関わりたくない、と誰でも感じることを狭い空間の中でどう解決するのか。この場合仕切りが必要なのではないか。

これら２つの観点から「過去」の団地が４人で住むのを想定した造りだったことを踏まえて、次のようなリノベーションプランを考えた。

・腕を広げて寝転ぶことのできる、円形を組み合わせたベッド
・食事や会話などをする時に４人で囲めるテーブル

一人ひとりのスペースが確保でき、コミュニケーションもとれ、仕事や就寝などプライベートの空間が欲しいときはカーテンで仕切る。至ってシンプルな造りとなったが、住む人によってこの空間に様々な色がついていくのではないだろうか。